

■ 米中間の通商交渉の行方を眺めつつ…ドル買いのチャンスがうかがう！？

米国による対中制裁関税の発動期限を明日（7/6）に控えて、いまだ「両国が適当な処で折り合うことを決めた」との報は伝わってきていない。

ただ、本日（7/5）の朝方には「駐独米大使が独自動車大手の社長らと会い、米国とEU間の自動車の関税をそれぞれゼロにすることを提案した」との独紙ハンデルスブラットによる報道も伝わってきており、米中間の通商問題についても「最終的には両国が現実的な対応を取るだろう」と見通す向きがまだまだ多いものと見られる。

そのせいか、足下のドルは「意外なほど底堅い」との印象が強い。ドル/円の日足チャートを眺めてみれば、現在110円台前半の水準には21日線と200日線が控えており、それらが目先の下値サポートとして意識されている。さらに、一目均衡表の日足「雲」上限も心理的な支えとなっており、よほどのことがない限りは「なおも底堅く推移する」と見られる。

少なくとも、ドル/円の月足・終値が6月に31カ月線を上抜けたという事実だけは動かせない（下図参照）。もちろん、少し遠めに見れば依然として同線に上値を押しさえられているようにも見えるし、実際、昨年10月の月足は辛うじて終値で31カ月線を上抜けたものの、結局はクリアに同線を上抜けることができなかった。ただ、今回は月足の「遅行線」が26カ月前の月足ロウソクの位置するところを上抜けるといった状況にもなっており、昨年秋とは少々事情が異なるとも言える。

なにしろ、昨年1月にトランプ氏が米大統領に就任して以来、ずっとドル/円の月足は31カ月線に頭を押しさえられ続けてきたのである。それだけに、ここでクリアに同線を上抜ける動きとなれば、そのインパクトは相応に強い。いずれにせよ、今後も月足でドル/円の値動きを追って行くことは怠りなくしたい。



一方で、今週のユーロ/ドルは21日線（現在は1.1659ドルに位置）に上値を押しさえられ続けながらも、一定の底堅さを維持しながら1.1650ドル処を中心に。

周知のとおり、やはり「難民・移民問題を巡って閣内対立を続けていたメルケル独政権の瓦解という最悪のケースがひとまず回避された」という点が大きかったと言えるだろう。もちろん「あのドイツですらポピュリズムの波に抗し続けることはできない」ということがあらためて明らかにされたことは今後長らく尾を引くことだろう。

しかるに、やはりユーロ/ドルに関しては「基本戻り売り」の姿勢を継続したい。仮に、一旦21日線を上抜ける展開になったとしても、1.1700ドル付近では試し売りを仕掛けるといった算段で臨みたい。

（07月05日 10:50）